

経済・金融 フラッシュ

タイ経済:21年4-6月期の成長率は前年同期比 7.5%増

～6四半期ぶりのプラス成長も、感染第3波の深刻化で経済の先行きは不透明

経済研究部 准主任研究員 齊藤 誠

(03)3512-1780 msaitou@nli-research.co.jp

2021年4-6月期の実質GDP成長率は前年同期比7.5%増¹（前期：同2.6%減）と急上昇し、市場予想²（同6.5%増）を上回る結果となった（図表1）。

4-6月期の実質GDPを需要項目別に見ると、主に内外需の回復が成長率上昇に繋がったことが分かる。

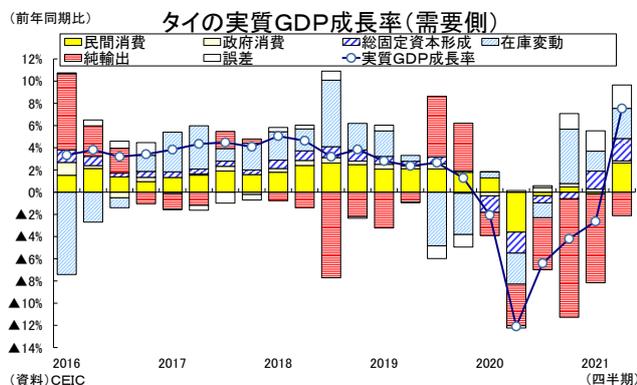
民間消費は前年同期比4.6%増（前期：同0.3%減）と大きく上昇した。費目別に見ると、交通（同13.2%増）と娯楽・文化（同29.0%増）、レストラン・ホテル（同8.2%増）が増加に転じたほか、食料・飲料（同2.4%増）や住宅・水道・電気・燃料（同2.2%増）、通信（同1.8%増）、保健衛生（同7.4%増）の増加が続いた。一方、衣類・靴（同15.3%減）は低迷した。

政府消費は同1.1%増（前期：同2.1%増）と小幅に鈍化した。

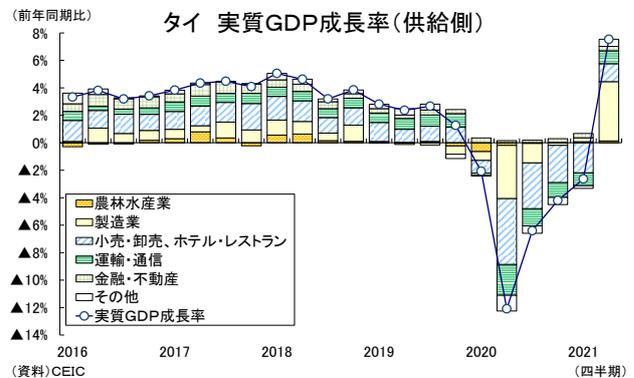
総固定資本形成は同8.1%増となり、前期の同7.3%増から小幅に上昇した。投資の内訳を見ると、まず民間投資が同9.2%増（前期：同3.0%増）と2四半期連続で上昇した。民間建設投資（同0.2%減）は引き続き減少したものの、民間設備投資（同12.2%増）が大きく伸びた。一方、公共投資は同5.6%増（前期：同19.6%増）と鈍化した。公共建設投資（同9.0%増）こそ好調だったが、公共設備投資（同4.7%減）が再び減少した。

純輸出は実質GDP成長率への寄与度が▲2.1%ポイントと、前期の▲8.0%ポイントからマイナス

（図表1）



（図表2）



¹ 8月16日、タイの国家経済社会開発委員会（NESDC）が2021年4-6月期の国内総生産（GDP）を公表した。

² Bloomberg 調査

幅が縮小した。まず財・サービス輸出は同 27.5%増（前期：同 10.5%減）と 2019 年 7-9 月期ぶりに増加した。財貨輸出が同 30.7%増（前期：同 3.2%増）と大きく上昇したが、サービス輸出が同 1.9%減（前期：同 63.6%減）と低迷した。一方、財・サービス輸入は同 31.4%増（前期：同 1.7%増）となり、輸出同様に急上昇した。財貨輸入（同 32.2%増）とサービス輸入（同 28.2%増）がそれぞれ大幅に増加した。

4-6 月期の実質 GDP を供給項目別に見ると、主に第二次産業と第三次産業の回復が成長率上昇に繋がった（図表 2）。

まず農林水産業は前年同期比 2.0%増（前期：同 1.3%増）と増加した。主要作物のコメやゴム、キャッサバ、パイナップルがけん引したほか、畜産や漁業・養殖業も増加した。

鉱工業は同 14.2%増（前期：同 0.3%減）と、2019 年 7-9 月期ぶりのプラス成長となった。まず主力の製造業は国内外の需要増を背景に同 16.8%増（前期：同 1.0%増）と大きく上昇した。製造業の内訳を見ると、自動車やコンピュータ・部品などの資本・技術関連産業（同 39.8%増）と石油化学製品、ゴム・プラスチック製品などの素材関連（同 10.3%増）、食料・飲料や繊維、家具などの軽工業（同 9.0%増）が揃って大幅に増加した。また電気・ガス業は同 0.9%増（前期：同 9.1%減）、鉱業は同 5.1%増（前期：同 4.6%減）となり、それぞれ増加した。

全体の 6 割弱を占めるサービス業も同 5.0%増（前期：同 4.3%減）と増加に転じた。サービス業の内訳を見ると、コロナ禍で低迷していたホテル・レストラン業（同 13.2%増）や運輸・倉庫業（同 11.6%増）、管理及び支援サービス（同 1.4%増）、芸術・娯楽等（同 93.4%増）、小売・卸売業（同 5.5%増）がプラス成長に回復したほか、情報・通信業（同 5.8%増）や建設業（同 5.1%増）、金融・保険業（同 2.3%増）、不動産業（同 2.7%増）、教育（同 0.6%増）、保健衛生・社会事業（同 4.9%増）は引き続き増加した。

（4-6 月期 GDP の評価と先行きのポイント）

タイ経済は昨年、新型コロナウイルスの感染拡大を背景に急速に景気が悪化、4-6 月期は新型コロナの感染拡大に伴い、タイ政府が昨年 3 月に非常事態宣言を発令、外出・移動制限を強化すると、4-6 月期の成長率が▲12.1%と急減した。タイ政府は早期のウイルス封じ込めに成功して段階的に行動制限を緩めたものの、年末年始には感染第 2 波が到来するなど本格的な経済活動の再開には至らず、実質 GDP は今年 1-3 月期までマイナス成長が続いたが、今回発表された 4-6 月期の成長率は前年同期比+7.5%のプラス成長となった。

4-6 月期の成長率の急上昇はベースの効果の影響が大きいとみられる。タイでは今年に入って新型コロナの感染拡大が続いている。感染状況は今年 4 月に変異ウイルスの流行などによる感染第 3 波が生じ、1 日あたりの新規感染者数は 3 月末の 100 人未満から 6 月末には 5,000 人程度まで増加した（図表 3）。感染状況の悪化により、タイ政府は首都バンコクなどで店内飲食の禁止や商業施設の営業時間制限するなど行動規制を次第に強化した結果、4-6 月期は人流が減少することとなった（図表 4）。こうした感染拡大と行動規制強化によってタイ経済にはブレーキがかかり、実質 GDP は前期比で見ると+0.4%の小幅なプラス成長に止まったが、前年の水準が大きく落ち込んでいた影

響で前年同期比の成長率は大幅なプラスとなった。

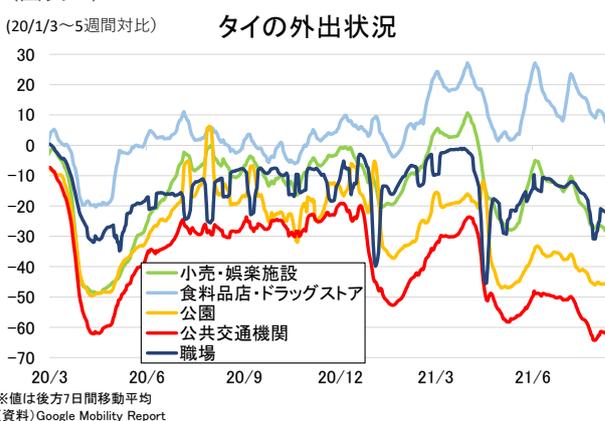
国内で感染拡大が続くなかでも、順調に回復したのが輸出（同 30.7%増）と公共投資（同 5.6%増）だ。特に財・サービス輸出は、観光業の不振が続いてサービス輸出（前年同期比 1.9%減）が低迷したままであるが、財貨輸出（前年同期比 30.7%増）はテレワーク関連製品や家電製品の出荷増により輸出全体をけん引した。

今後は都市封鎖の継続や新型コロナウイルスワクチンの普及（現在のワクチン完全接種率は 25%）により感染状況が次第に落ち着き、タイ経済の回復ペースに勢いがつくとみられる。しかし、足元においてもタイの感染第 3 波は収束が見通せない状況にあり、当面は厳しい経済情勢が続くそう。タイ政府は 7 月中旬に首都バンコクなど 10 都県（全 77 都県）で都市封鎖を実施し、8 月から都市封鎖の対象地域を 29 都県に拡大しているが、新規感染者数は 1 日あたり 2 万人を超えるなど感染状況は悪化の一途を辿っている。タイでは、今年 7 月からプーケットなどでワクチン接種済みの外国人旅行者を入国後の検疫隔離なしで受け入れる実証実験「観光サンドボックス」が開始したが、プーケット県の感染拡大によって観光サンドボックスの継続に不透明感が強まってきている。現在の感染第 3 波の収束が遅れるほど観光産業への打撃は深刻さが増すこととなり、その後の経済の立ち直りが鈍くなる恐れがある。

(図表 3)



(図表 4)



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。